

概念課題の教え方

2023. 1. 15 北陸定例会

藤坂龍司

1. 概念とは

共通の特徴を持つ事物やその特徴、属性などを一つのまとまりとして認識したもの。

物の名前も概念。より抽象度の高いものとして、

色、形、分類、形容詞、位置、性別世代、同じ違う、などさまざまな概念がある。

2. 概念形成の手順

(1) 色概念の形成を例に

色に気づかせる → 色に名前がある → 濃い赤も薄い赤も赤 → りんご何色？赤いもの言って

前言語段階

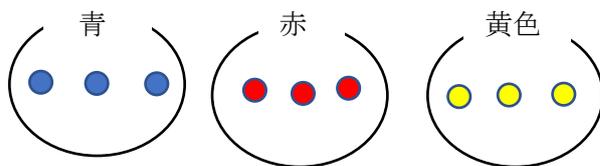
概念の命名

概念の般化

概念の応用

①色に気づかせる

まず色マッチングを通じて、色の違いに気づかせる。

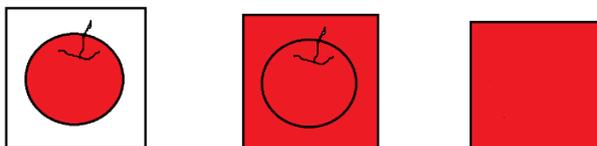


②色に名前がある（色の命名）

基本的には、マッチングの直後に、受容的命名 → 表出的命名 の順で教える。

うまく行かない場合、物の名前から色へと移行する方法もある。

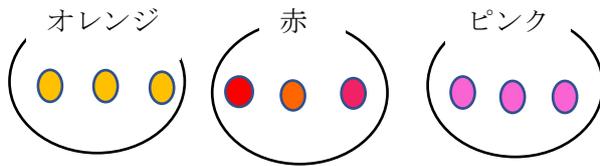
赤りんご → 赤り.. → 赤



③濃い赤も薄い赤も赤（概念の般化）

「赤」という概念に、濃い赤も薄い赤も入る、と認識させる（般化）。と同時に、オレンジやピンクなど、よく似た別の色とは区別させる（弁別）。

再びマッチングで。



④りんご何色？（物の属性としての色）

いろいろな色の物を並べて、一巡目では物の名前を言わせ、二巡目では色を言わせていく。

「これ何？」「りんご」「バナナ」「ピーマン」「だいこん」

「りんご何色？」「赤」「黄色」「緑」「白」

⑤赤いもの、言って（カテゴリーに属するもの）

再びマッチングから。いろいろなものを色ごとにお皿に仕分けさせて。

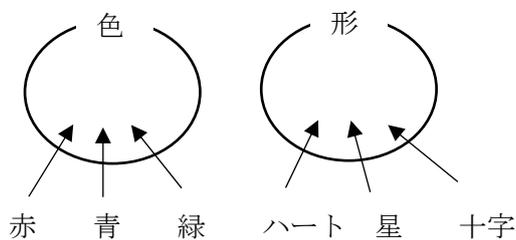
赤い物のお皿を持ち上げながら、「赤いもの、言って」

⑥赤も青も黄色も色（「色」という上位概念の命名）

再びマッチングで。

色カードと形カードを分類マッチング。→「色」「形」と言って、選ばせる。

中級後半から上級の課題。「色の名前教えて」「どんな色が好き？」などの質問で般化させる。



2. いろいろな概念課題：教え方のポイント

(1) 分類概念

○最初は動物、果物、乗り物の三つを教える。

○分類マッチングから始める。

分類の場合は、色と違って、この段階で概念の般化に気を付けた方がよい。

つまり教材が偏らないように、その分類に属する代表的なものをなるべく幅広く、最初から教材に含めておく。

例えば乗り物なら、車ばかりにせず、電車、飛行機、船を入れておく。乗り物イコール車、と思いつまかせないため。

(2) 大小

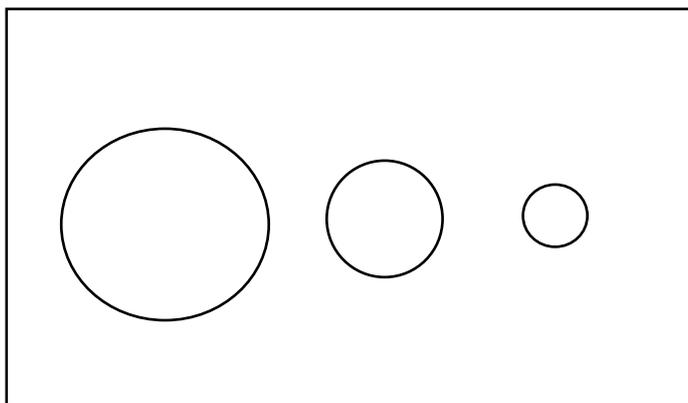
○大きさだけがはっきり違う1対の物を用意する。マッチングから始めなくてもよい。選んだ一対の物で、まず「大きい」と「小さい」を区別させる。受容→表出。

○ランダムローテーションの際、教え手がつい「大きい」から始めてしまうので、子どもはそれを読んでしまう。それでは真の理解につながらないので、最初のうちはいいが、途中からは二回に一回は「小さい」から始めるように。

○相対的大小と絶対的大小

最初は人間（特に子ども）を暗黙の基準として、ゾウやクジラや恐竜は大きく、アリや子犬は小さい、と教えてよい。

中級後半に入ったら、相対的大小を教えてみよう。例えば下の図で、右端の一番小さな丸を隠し、左と真ん中だけ見せて、「どっちが大きい？／どっちが小さい？」と聞く。次に左端の丸を隠して、真ん中と右端だけを見せて、「どっちが大きい？・どっちが小さい？」と聞く。



(3) 性別と世代

○おにいさんとおねえさん

性別はまず「おにいさん」と「おねえさん」から教える。

最初から「おとこ」「おんな」と教えてしまうと、男の人を「おとこ」と言ってしまうから。「おにいさん」「おねえさん」が呼び名として一番応用範囲が広く無難である（「おねえさん」と呼ばれて怒る女の人はいない）。

教え方は、インターネットで十代後半から二十代くらいの、なるべく男らしい男性と女らしい女性の胸から上、正面写真を選んで、ペアを作る。一つのペアで徹底的に「おにいさん」「おねえさん」の名前付けをする。

その後で、別のいくつかのペアでも同じようにな間付けを受容→表出の順に教えることで、般化を促進する。

○その他の性別世代

おにいさん、おねえさんのあとは、おじいさん、おばあさん、男の子、女の子、赤ちゃんの順で、性別と世代を同時並行で教える。「おじさん」「おばさん」は無理に教えなくてもよい。

○上位概念としての「おとこ」と「おんな」

お兄さん、おねえさん、おじいさん、おばあさん、男の子、女の子を習得したあとで、それらの上位概念として、「おとこ」「おんな」を教える。これらの写真カードを、男は男、女は女でマッチングさせ、「おとこ」「おんな」と受容的命名→表出的命名をする。

4. 上級概念のいくつか

(1) 絵と字

字（ひらがな）が書けるようになると、「リンゴ描いて」と言うと、リンゴの絵を描かずに字を書く子どもが出て来る。そこで、「リンゴの絵」と「りんごの字」を区別させなければならない。

教え方は比較的簡単。ここでもマッチング→受容的命名→表出的命名の手順を取る。

いろんな絵カードと字カードを作っておき、絵カードは絵カード同士、字カードは字カード同士、一緒にさせる。

「絵」と言っても、絵カードばかり集めたお皿をさわらせる。「字」と言っても平かなカードばかり集めたお皿をさわらせる。ランダムローテーション。できたら表出も。

あとは応用。例えばリンゴの絵カードとリンゴの文字カードを並べておき、「りんごの絵」「リンゴの字」で選ばせる。

いろんな物で般化。

選べるようになったら、今度は書かせる。「リンゴの絵」「リンゴの字」で選ばせた後、「リンゴの絵、描いて」、「りんごの字」で選ばせた後、「りんごの字、書いて」

(2) 人

上級になったら、子ども自身も含め、男の子、女の子、お兄さん、おねえさん、おじいさん、おばあさんがすべて「人」なんだということを理解させたい。

概念の意味をよく理解させるためには、対抗概念が必要。ある子どもは「妖怪」が好きだったので、「妖怪」と「人」を対比させることにした。

ねずみ男、砂かけばあ、ぬりかべ、子泣き爺 → 妖怪

ママ、パパ、おじいちゃん、おばあちゃん、おにいちゃん、自分 → 人

(3) 生物と無生物の違い（「いる」と「ある」）

日本語では、語尾に「いる」をつけるか、「ある」をつけるかで、生物（動物）か無生物+植物かが分かる。

「うさぎがいる。キツツキがいる。池がある。山がある。大木がある」

だから意外と早く、生物と無生物の区別を教える必要性が出て来る。

教え方は、いろんな生き物（動物、人形）と無生物を、机の上で、横一列に並べる。例えば端から、りんご、イチゴ、車、コップ、ぞう、コアラ、アンパンマン、カエル、飛行機、トマト、ちゃわんの順に並べる。つまり生物と無生物を混ぜるのではなく、最初は無生物ばかり、途中から生物ばかり、それからまた無生物ばかり、の順に並べる。

子どもに端から指ささせながら、「りんごがある、イチゴがある、車がある、コップがある…」と言わせていく。最初はあなたが言ってやり、まねさせる。

途中で生物のところに来たら、「いる」に変える。「ぞうがいる、コアラがいる、アンパンマンがいる…」最後は再び、無生物に戻る。飛行機がある、トマトがある、茶わんがある。

これを何度も練習して、子どもが自分で、「ある」から「いる」へ、再び「ある」へ、正しい場所で切り替えることができるまで教える。

